
シンポジウム 2

BPH・OAB におけるそもそもとまっとう

司	会	椎	名	浩	昭	(島根大)
		羽	賀	宣	博	(福岡大)
演	者	高	橋	良	輔	(総合せき損センター)
		坪	井	一	朗	(島根大)
		本	田		聡	(島根大)
		本	田	正	史	(鳥取大)
		中	村	信	之	(福岡大)

司会のことば

「BPH・OAB におけるそもそもとまっとうを考える」哲学的ともいえる大きなテーマを大会会長の賀本先生から頂戴しました。軽率短慮になりがちな私たちの日常診療を見抜くようなテーマで、はたと考えさせられました。そして、そもそも、まっとうという言葉は、両者とも、わかるようでわからない言葉でしたので、調べてみますと、「そもそも」とは、「元来」と言う意味であり、「まっとう」とは、「真面目なさま」を示しています。

そもそも、BPH、OAB 共に、その発症要因は、現在でも未だ完全に解明されているとはいえません。BPH に関しては、前立腺が腫大していても、必ずしも症状が出現するとは限りません。また、OAB は単なる膀胱平滑筋の異常というだけではなく、中枢性、尿道由来、骨盤臓器のクロストーク等、様々な発症要因が報告されています。これら BPH と OAB に対して、様々な治療が実施され、各種診療ガイドラインが上梓されています。通常、私達はそのガイドラインに従い、診療を行っています。これによって一定水準の医療を提供することは可能です。しかしながら、日常診療においては、ガイドライン通りに、そのまま当てはまらないケースも多々あります。その際に重要になってくるのが、基本に立ち返り(そもそも)、患者さんに真正面から向き合い(まっとう)、疾患に対峙していくことかと思えます。

今回は、BPH と OAB に対して、それぞれ臨床的な側面にフォーカスを当てて、BPH の薬物治療・外科的治療、

OAB の薬物治療・非薬物治療、そして夜間頻尿というテーマで、各分野のエキスパートにご登壇いただき、ご自身の豊富な経験をお話いただきました。エキスパートの先生方は、当然のことながら、まっとうな医療を展開し、その結果、多くの患者さんを診療されています。多くの患者さんを見ることで、私達にはうかがい知ることができない、疾患の、そして治療の本質を見抜いているようなご講演を賜りました。

まず、総合せき損センターの高橋良輔先生からは、BPH の薬物療法として、 α_1 遮断剤、PDE-5 阻害薬、5 α 還元酵素阻害薬等の適切な使用方法をご教示いただきました。特に、 α_1 遮断剤に 5 α 還元酵素阻害薬の長期併用例における、 α_1 遮断剤の中止の可能性のお話は大変興味深く拝聴いたしました。BPH の手術療法に関して、島根大学の坪井一朗先生は自験例に基づく解析結果として、30 mL 以下の比較的小さな前立腺肥大症に対しても HoLEP は有用である事を示されました。坪井先生は手術療法に関する臨床研究データを世界的な論文に既に公表されており、将来有望な若手泌尿器科医として期待できそうです。さらに、島根大学の本田聡先生からは、OAB の薬物療法に関してご講演を賜りました。本田先生は、ご自身で、いわゆる「排尿」に関する様々なリサーチクエスチョンを作成され、それを公表されており、いつも興味深くご講演を拝聴しておりました。今回のご講演では、下部尿路症状に関する質問紙に関して、同一患者さんが同時期に記載しても、必ずしも一致しないという、大変興味深いデータをお示し下さいました。また、

患者さんが治療に不満を持っていたとしても、様々な理由から薬剤の変更は希望しない、あるいは変更に至らないというデータも示され、私自身が日常診療で抱いていた素朴な疑問を証明していただき、非常に納得のいく結果でした。難治性過活動膀胱に対する治療、特に神経変調療法とボツリヌス療法に関するテーマは、本邦におけるこの領域のオピニオンリーダーである鳥取大学の本田正史先生から様々な臨床データをお示しいただきました。特に私は、難治性過活動膀胱の定義が、なぜ12週間の薬物療法に抵抗を示す場合とされたのかというお話が印象的でした。最後に、福岡大学の中村信之先生からは、ご自身のフィールドワークとされている、BPH・OAB・睡眠障害に関する疫学研究と、腎移植症例における夜間

頻尿に関する興味深い話題をご提供いただきました。腎移植の患者さんにおける夜間頻尿とそれに関するQOLの影響を検討した研究は少なく、会場の先生方からもいくつかご質問をいただきました。

現在では、泌尿器科科学は様々なサブスペシャリティに分かれており、専門外の分野をキャッチアップするのは一苦労です。一方で、下部尿路症状を有する患者さんは非常に多いため、排尿を専門としない先生方も、通常外来診療などで、必ず診療されるかと思います。私たち泌尿器科医が基本に立ち返り、BPHとOABでお困りの患者さんに、ベストな医療がご提供できるように、本総説が、日常診療に少しでもお役立ていただければ幸いです。